敦煌出土のチベット訳般若心經

上　山　大　峻

敦煌出土のチベット語文獻は India Office Library（スタイン蒐集のもの）とフランス國民圖書館（ペリオ蒐集のもの）とに大部分が所藏されている。最近，故プサン教授とラルー女史とにより目錄が整理されてそれぞれ刊行された[1]。このチベット語文獻は，量からいつても漢文々獻に匹敵するのものであり，後にのべるように綴字法も古法を用いた初期佛典チベット譯の事情を傳えているものとして，きわめて價値が高い。それにもかかわらず，F. W. Thomas が佛典外の documents を捜して譯出を試みた[2]以外には，內容に觸れた研究は殆ど發表されていない。文獻を通觀したところ，色々と問題があり，チベット語文獻の全貌が解明されてゆくには，なお時間をかけた研究が必要とされるであろう。いま本稿ではその緒としてまずチベット譯般若心經をとりあげて檢討を試みてみたい。

プサン，ラルー兩目錄にみると Ārya-prajñāpāramitā-hṛdaya の題で出されるものを70餘點數えることができる。このほかプサン目錄 No. 118 に Bhagavatī-prajñāpāramitā-hṛdaya とするもの一點。ラルー目錄 No. 448 に Transcription phonétique de la version chinois と說明するもの（漢譯本をチベット字で音寫したものらしい）一點がある。注釋には，兩目錄合せて7點ある。プサン目錄でみると，これには Prajñāpāramitā-hṛdaya-vṛtti とするもの（No. 122, 124, 125）と -vyākhyā とするもの（No. 123, 126）がある。ラルー目錄の2點は vṛtti か vyākhyā か目錄の說明からだけでは分らない。現在われわれが直接內容を確かめうるのは，本邦に寫眞が將來されている India Office のものだけであり，ペリオ蒐集の分は全く見ることができない。それも不鮮明なものがあつたり

（1） Late Louis de la Vallée Poussin; Catalogue of the Tibetan Manuscripts from Tun-huang in the India Office Library, 1962
M. Lalou; Inventaire des manuscripts tibétains de Touen-houang, I, II, III, 1939～61

（2） F. W. Thomas; Tibetan Literary Texts and Documents Concering Chinese Turkestan, Part I, II, III, 1935～55

して，全部の心經を確かめたわけではないが，目錄の説明の助けもあり，次のようなことが分つた。

大部を占めている Ārya-prajñāpāramitā-hṛdaya は小本（略本もいう）の心經に合うチベット譯である。Bhagavatī-prajñāpāramitā-hṛdaya は首部二，三行を殘す斷簡であるが，大本（廣本もいう）に合う心經である。注釋の方の vṛtti と vyākhyā とは內容が相違しており，前者は小本心經に，後者は大本心經に注釋したものである。以上のように敦煌のチベット文獻の中にはそれぞれ大小兩本の心經と注釋があるわけである。

これらのうち，大本の心經は現行のチベット藏經 No. 160（北京版）に收錄する Vimalamitra らの譯 Bhagavatī-prajñāpāramitā-hṛdaya によく合う。注釋の方も，大本に對する注釋の完本（Fragment 56）を藏經中の七種の注釋に對照してみると，No. 5218（北京版）の Jñānamitra; Āryaprajñāpāramitā-hṛdaya-vyākhyā に題名も內容も一致することが分つた。ところが，小本の方は經典も注釋も藏經の中に存在を確認することができない。vṛtti の No. 122 は完本で（首部少量を缺くが）しかも末尾に作者が Kamalaśīla であることを明記した Colophon がある。そこで，藏經 No. 5221（北京版）の Kamalaśīla の心經注，Prajñāpāramitā-hṛdaya-nāma-ṭīkā と對照してみると全然別種である。その上興味あることに，藏經所收の七種の注釋の中ではつきり小本に注釋したものは一つもない。8 世紀末成立と推定するデンカルマ目錄には，經典の方は ḥphags pa śes rab sñiṅ pa（芳村本 No. 14）とするだけで，大本か小本か分らない。注釋は ḥphags śes rab sñiṅ poḥi rgya cher ḥgrel pa / slob dbon Vi-ma-la-mi-tras mdsad pa（同，No. 529）と記されるので vyākhyā の方が入つている。しかし，Kamalaśīla の注釋は報告していない。要するに，小本關係のチベット譯の方は，正式に藏經に收錄されることはなかつたらしい。

次に敦煌本チベット譯般若心經（小本）のテキストを揭げよう。

敦煌新出チベット譯般若心經（小本）

Fragment 49 a は鮮明な完本で標準型に近いのでこれを底本に採り，Kamalasīla の注釋（ch. 30. 18）本文と校勘にした）

// rgya gar skad du // a-rya-phrad-ña-pa-ra-myi-ta-rhi-da-ya // bod skad du ḥphags pa śes rab kyi pha rol tu phin paḥi sñiṅ po bam po gcig go /

/ thams cad mkhyen pa la phyag ḥtshal lo // ḥdi ltar ḥphags pa kun tu

spyan ras gzigs kyi dbaṅ po byaṅ chub sems dpaḥ śes rab kyi pha rol tu phyin pa zab mo spyad pa spyod paḥi tche // rnam par bltas na lṅa chuṅ de dag ṅo bo ñid kyis stoṅ par mthoṅ ṅo // ḥdi ni śa riḥi bu gzugs stoṅ pa ñid de / stoṅ pa ñid kyaṅ gzugs so // gzugs daṅ stoṅ pa ñid[(1)] tha dad pa yaṅ ma yin / gzugs daṅ yaṅ tha myi dad[(2)] do // gag gzugs pa de stoṅ pa ñid / gag stoṅ pa ñid pa de gzugs te / de bshin du tshor ba daṅ / ḥdu śes pa daṅ / ḥdu byed daṅ / rnam par śes paḥo // ḥdi ni śa riḥi bu chos thams cad stoṅ pa ñid kyi mtshan ma ste / myi skye myi ḥgog / myi gtsaṅ myi btsog[(3)] / myi ḥphel myi ḥbri / de lta bas na śa riḥi bu stoṅ pa ñid la gzugs kyaṅ myed / tshor ba yaṅ myed / ḥdu śes kyaṅ myed / ḥdu byed kyaṅ myed / rnam par śes pa yaṅ myed / myig daṅ rna ba daṅ / sna daṅ lce daṅ / lus daṅ yid kyaṅ myed / kha dog[(4)] daṅ sgra daṅ dri daṅ ro daṅ reg daṅ chos kyaṅ myed / myig gi khams nas yid gyi khams su[(5)] yaṅ myed / rig pa yaṅ myed / ma rig pa yaṅ myed / rig pa zad pa yaṅ myed / ma rig pa zad pa yaṅ myed pas na rgas śiṅ śi ba yaṅ myed / rgas śiṅ śi ba zad pa yaṅ myed / sdug bsṇal daṅ ḥdus[(6)] pa daṅ ḥgog pa daṅ lam yaṅ myed / śes pa yaṅ myed / thob pa yaṅ myed[(7)] ma thob pa yaṅ myed par byaṅ chub sems dpaḥ śes rab kyi pha rol tu phyin pa la gnas te / spyod pas / sems spyod pa yaṅ myed / sems myi spyod pa yaṅ myed // de ltar myed pa la gnas pas na / log pa las śin tu ḥdaḥs te / thub[(8)] pa ni mya ṅan las ḥdaḥs paḥo // dus gsum du rnam par shugs paḥi saṅs rgyas thams cad kyaṅ śes rab kyi pha rol tu phyin pa la gnas te / spyod[(9)] pas lba na myed pa gyuṅ druṅ[(10)] rdsogs paḥi byaṅ chub du kun tu mṅon par saṅs rgyas so // de bas na[(11)] śes rab kyi pha rol tu phin pa chen poḥi sṅags / rig pa chen poḥi sṅags / bla na myed paḥi sṅags / mñam pa daṅ myi[(12)] mñam paḥi sṅags / sdug bsṅal thams cad rab tu shi baḥi sṅags / bden te / myi brdsun bas na śes rab gyi pha rol tu phin paḥi sṅags smras so / sṅags la[(13)] tad dya tha ḥgaḥ te ḥagḥ te pa ra ḥgaḥ te pa ra saṅ ḥgaḥ te / bho de svāḥā /

ḥphags pa ṣes rab kyi pha rol tu phyin paḥi sñin po rdsogs so /

/ caṅ cin dar bris /

注釋本文（V.）との主なる差異

（1） ñid→V. gñis kyaṅ（前者が正しい），（4） kha dog→V. gzugs（後者をとる。前者 varṇa の意），（6） ḥdus→V. kun ḥbyuṅ（大本は後者に譯す），（8） thub→V. thar（後者をとる），（9） V. om. te / spyod（無くても可），（10） gyuṅ→V. yaṅ dag par（普通後者に譯す），（11） V.+śes par bya te（あった方がよい），（12） mñan pa daṅ myi→V. myi mñan pa daṅ（後者の方が Skt. に合う），（13） V. om. sṅags la

（あった方がよい）

上掲のチベット譯は下記の少例を除けば，サンスクリット原本（岩波文庫中村元校訂本）に忠實な直譯である。

（2） Skt. śūnyatāyā na pṛthag rūpam に合せれば，stoṅ pa ñid daṅ gzugs yaṅ tha myi dad do となるであろう。（3） Skt. amalāvimalā の順に從えば，myi gtsaṅ（不淨）myi btsog（不垢）は前後する。（5） Skt. na mano-vijñāna dhātuḥ の vijñāna を譯していない。（7） Skt. tasmāt を譯していない。

小本のチベット譯々者は不詳であるが，大本と譯語の用い方々かなりの差があるから，大本とは別人の譯である。ところでこの小本の譯語例には，見なれないものが多い。次に眼を惹くものをあげる。

(Skt.)	(大本譯語)	(小本譯語)
avalokiteśvara	spyan ras gzigs dbaṅ phyug	kun tu spyan ras gzigs kyi dbaṅ po
pañca-shandha	phuṅ po lṅa po	lṅa phuṅ
lakṣana	mtshan ñid	mtshan ma
amala	dri ma med pa	myi btsog
avimala	dri ma daṅ bral ba med	myi gtsaṅ
jarāmaraṇa	rga śi	rgas śiṅ śi ba

以上のようであるが，大本の譯語は Mahāuyutpatti のそれともよく合うことを注意しておきたい。言われているように，初期飜譯時代の途中で，Mahāvyutpatti の編纂が行われ，佛典チベット譯の上に舊譯語から新譯語への統一が行われたとすれば[3]，そうした事情に小本譯が藏經から省かれる一因があるのであろうか。

テキストの末尾に記されている caṅ cin dar bris とは，この文獻の筆寫人の署名で「張進達（？）寫す」の意である。敦煌出土のチベット文獻はすべて手抄本であるが，その末尾に上例のような書寫人の署名を行う場合が多い。校勘人の署名を行うときもある[4]。これに漢人名が多いのは，チベット人が敦煌を占領するや漢人寫經生にチベット語を習わせ，筆寫させた事情を物語るものである。このようなことは，敦煌がチベット人に占有された時期（781～848 A. D.）に起つたことで[5]，從つてこれら敦煌出土のチベット語文獻は，その期間のものであることが明

（3） 稻葉正就『チベット語古典文法學』p. 22～3 參照

（4） 藤枝晃・上山大峻「チベット譯無量壽宗要經の敦煌寫本」ビブリア 23 號古版書誌論叢，1962 參照

（5） 藤枝晃「吐蕃支配期の敦煌」東方學報 31 册，1961 參照

白である。

この時期のチベット佛教はまだ初期の導入段階であり，佛典の飜譯事業も漸く緒に着いた頃である。現行のチベット藏經は，ずつと後になつてそれらを取捨し，改訂新加して整理したものであることを知らねばならない。すなわち，敦煌チベット文獻は，チベット譯經史の原初型を傳えるものであり，それ故に現藏經に入つていないものや，同題別本のもの，草稿本風のものなどを含む場合が多いのである。いまは般若心經にかぎつて考察を試みたが，今後他の方獻にも調査を及ぼすならば，なおいろいろな事情が分つてくるであろう。

（文部省奬勵研究費による研究成果の一部）

寄稿されなかつた諸氏の研究發表題目（3）

淨土教における報身の問題	澤田謙照
寶慶記に於ける二、三の問題	伊藤俊彦
道元禪師の本流思想形成について	青龍宗二
道元禪師の示せらる自己の立場	渡邊勝人
清規にみられる戒律の研究	大石守雄
「坐禪用心記」の傳播における問題	清野宗元
往生と滅罪	五來重
補陀落信仰についての一、二の問題	成田俊治
明惠の善導解釋	上原信矣
智光の本願觀について	明山安雄
「三教指歸」に見られる思想上の性格	二宮泰臣
眞實教の特質―眞蹟本教行信證の改訂問題に關連して―	雲村賢淳
三昧聖について―近畿地方における分布とその實態―	增池光昭
西南院文書について	和多昭夫
毛越寺の常行三昧法則について	光森正士
近世町人の宗教意識	近津經史
島地默雷のキリスト教批判について	福島寛隆
大和松尾寺所藏の當山修驗史料について	鈴木昭英
觀想的經驗の藥劑心理學的研究	佐藤幸治